
グッバイトリガー

空無アキラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グッバイトリガー

【ΖΖコード】

Ζ3652F

【作者名】

空無アキラ

【あらすじ】

平穏という偽りで塗り固められた世界、そこには光と闇の戦いがあつた。人間の心の闇から染み出る瘴気によって生まれた喰闇（ゼノス）、それを狩るために選ばれた戦士たちとの終わりなき戦争の中で成長していく少年少女たちを描く。

プロローグ

戦いは常に手が届く場所にある。

なのにはそれをまるで汚物のように敬遠し、遠ざける。

本能の内には誰でも長い年月の中で培つてきた戦闘本能があるはずだ。

でもいつの日かそれは厳重な心理の檻に囚われ、静かに眠つてしまつた。

そのため人は知らないところでいつもストレスを溜め込んでいる。

溜め込まれた黒い塊は一点に集束し、一つの存在を生み出してしまつた。

暗闇（ゼノス）。

それは生きた闇。

それは死した光。

それは人間の体ではなく心に生まれる狂氣を餌とする。

そのたつた一つの欲望を満たすため怪物は今も現代社会の奥底で蠢いている。

特に生息密度の高い日本には世界主要国からの援助を受けて対策本

部が設立された。

それは六花扇ろっかせんと名づけられ、日本各地に支部を置き活動している。

これは世界の命運をかけた光と闇の戦争である。

この終わりなき戦争に終末の符を打ち込むため、平和を装つ世界の裏で今日も人々は戦い続ける。

いずれ訪れるはずと夢見る平穏のために。

プロローグ（後書き）

「意見」「感想お待ちしております。

第一話・出会い 一部

眠気を払ってくれる肌を刺すような冷たい風が吹く早朝。

時刻は六時二十五分。

築三年の新築一階建ての一軒家、一階にはリビングと風呂と押入れ代わりの個室が一つ。一回には四部屋がそれぞれ向かい側に扉が顔を合わせている。

奥の右側の部屋、扉には部屋の主の名がローマ字で刻まれた札がかけられている。

室内は朝日が差し込む白いレースのカーテンがかけられた東側の窓が一つ、参考書が綺麗に並べられた勉強机、ワックスのかけられたフローリングの床。

全体的に白が並んだ部屋には暖かい雰囲気が漂つ。

東側の窓から差し込む朝日が部屋の隅に置かれたベッドでナマケモノのように寝そべる部屋の主に降りかかる。

瞼を痙攣させて、もう一押しで夢の世界から脱出寸前であることを教えてくれる。

トドメとばかりに枕元に置かれたアナログ目覚まし時計の大音量のベルの音。

静かな朝には付き物の目覚ましの声、ベットの上で毛布に包まる物

体は奇妙な唸り声を上げて一コキと軽度の日焼けを負った手を伸ばして耳障りに白の壁紙で彩られた部屋の中を響き渡る音を止めようと振り上げる。

「つる……せ……え」

薄い意識を振り絞つて握り締めた拳で音源である田覚まし時計を叩きつける。

しかし、その時計は停止するどころかベルの音には黒板を搔くような軋む音が混じる。

「あ あっ！ つるせえつて言つてんだろつがー。」

半破損した奇天烈な音の音源を今度は殴るだけじゃなく、その後に壁に投げつけるところ一連コンボをかます。

中の部品が飛び散るほどに完全分解した田覚まし時計であつたはずの金属の塊が床に散乱する。

同時に部屋の扉が高い怒声とともに開かれる。

「まだぶつ壊したの？ いつたい何回田覚まし時計買い換えれば気が済むのよ。毎回毎回壊すたびに人の眠気を邪魔するのやめてくれるー？」

「つるせえつ！ 未だにそんなダサい熊柄のパジャマ着てる単細胞女に言われたくないわ」

指摘されたパジャマは確かに今時の小学生でも喜ぶかどうか不明な

クマさんの刺繡が十数箇所施されている。

これではそういう罵られるのも無理はない。

「あんたみたいなヘタレに人の趣味を罵倒する筋合いないわ！ 未だに彼女の一人もいないくせにい！」

さきほどどの田覚まし時計にも負けない高い声。

「誰がヘタレだあ！ おまえみたいに何股もかけてる奴と一緒にすんな！ 言つとくが俺は彼女はいないんじゃなくて作つてないだけと何回言わせねばわかんだよ」

「ふん！ たしかに毎日下駄箱に溢れるほどの中ラブレターが詰め込まれてるみたいだけど、所詮顔だけのあんたなんかすぐに飽きられるわよ。それがわかつて誰とも付き合わないんでしょ？」

「つたくこの話蒸し返すといつもそつ言つ。おまえはもう少し語彙力増やしてから俺に話しかける。」ジジン口女

「だ、誰が ミジン……」

今日一番の金切り声を発しようと一拍の間が置かれる。

「あんたたちい！ また朝っぱらから兄弟喧嘩？ 『近所迷惑だから止めなさい』って何回言わせるの？」

その前に違う場所からの大音声が言い争つていた二人の体をビクつかせる。

部屋の外から廊下を荒く踏み鳴らす音。

金髪のカールがかかったウェーブヘアを揺らし、黒いブラが透ける白いTシャツに下は黒のパンティだけというなんとも大胆な姿の女性。

鋭い鷹のような眼光を一人に向け、開けっ放しだった扉の前を塞ぐように仁王立ちで立っている。

「ほりあ、母さんまで起きちゃったじゃないつ！ 鳴太あんたのせいよ」

「姉ちゃんのその蝉みたいな声が原因だろ？」

「誰が蝉……」

「鳴太！ 奈々！ あんたたちの今日の朝飯抜きつー！」

「そんなど！」もあるよう静かな朝に一つまみの塩をえたようなちょっと騒々しい朝の光景。

「ええーーー！」

ため息に不満が混じつた二つの声が清楚な早朝の住宅地を山びこのよに木靈した。

第一話・出会い 一部（後書き）

更新は色々な都合で遅れますが、長い間で『いろいろ下さる』。『意見』
感想などお待ちしております。

第一話・出会い 一 部

それから三十分後、リビングにはいつもの四人が朝食の白飯と味噌汁と卵焼きとたくあんが並んだテーブルに座していた。

「朝飯抜きじゃなかつたの？」

卵焼きを頬張りながら姉、霧島奈々はそう尋ねた。

「よく考えたら、今日の『飯炊けるように予約してたから、『今日の晩御飯抜き』に変更したわ」

「ちよ、ちよつと… 今日は確か焼肉パーティーじゃなかつたの？」

「それも松坂牛の」

「そうだつて！ 明日の晩御飯抜きでもいいから今日だけは勘弁してくれよ」

弟である霧島颯太も加わり、一人揃つて額に冷や汗を浮かばせ、必死な表情で母親に抗議する。

「これもいい機会だ。おまえたちももうちょっと仲良くなれるよつ心がける」

白髪が目立つ髪、ネクタイを締めたスーツ姿の父親が母親の意見に念を押す。

年が一つだけしか違わない思春期真っ盛りの高校生兄弟に仲良くしろといつまうが無理な話だろ？

「それとも……来月のお小遣い無しの方がよかつたあ～～？」

呑んでいた麦茶のコップをテーブルに金槌を振り下ろすかの速度で叩き、兄弟二人を同時に睨みつける。

蛇に睨まれた蛙の「」と「」一人は硬直し、持っていた箸を床に落としてしまつ。

「お、俺今日朝練あるから、お先にっ！」

「あ、こら置いてくなあつ！」

姉の憐い断末魔も耳に入らず、ソファーに置かれたボストンバッグを引っつかみ、脱兎のごとく家を飛び出す。

いつもなら肌を震わせるほどの一文句言つてやるとこりうだが、今日はむしろ汗が垂れるほどに暑かつた。

もちろん、あの母親のせいであるのは間違いない。

あの日を見てしまうと数分はまともに呼吸できないくらいの効果があるようで、颯太は自宅から離れた今も胸に手を置きながら呼吸を荒げて登校している。

（あの日をみたのは一年ぶりだな）

徐々に落ち着きを取り戻してきた心臓に安堵し、これからは見せかけだけでも姉と仲良くしようと決意する颯太だった。

『朝練』といつのはいわゆるも朝練習、部活の朝に行つ練習である。

近くには住宅街と商店街が発展する町で唯一の約一百メートルの坂道を登つた高所に建つ私立渡河学園は中等部と高等部があり、颯太が通う高等部にはほとんどが中等部の出身のHスカレーター式学校である。

一年G組十四番霧島颯太が所属する部活は剣道部、それも一年でりながら主将という実力を持つている。

さらに颯太は成績も学園順位は一桁という才色兼備、文武両道という言葉がぴったりな一般的の女子なら放つておかれない存在だった。

しかしとうの本人はその自分の異常なモテ度を生まれながら持病を患つているくらいに嫌っていた。

どうしてかこうしてか颯太は昔から女子、特に同世代の女子が苦手であった。

例外と言えば実の姉の奈々と……、

「よ、おはよっ！ そうちゃん」

学校に続く三つの坂道のうち一一番急な坂道の上を絶賛登校中だった颯太の肩を軽く叩き、横に並んで挨拶するこの一人の女子くらいなのだ。

赤みがかつた自然なショートヘア、真珠のようく白い肌、太陽のよ

うに明るい笑顔を浮かべて颯太に向ける。

制服の胸のリボンの色が黄色であるのは颯太と同じ一年生である証だ。

「よつ、椎名も朝練か大変だな」

一年G組十六番椎名美代、颯太と同じく剣道部所属で腕も一年の中では実力は相当のものであるが、成績は毎回赤点寸前という能天氣天然バカでもある。

だがルックスはアイドル顔負けの顔立ち、スタイルは学園一で特に胸の大きさは歩くだけで揺ら揺らと揺れ、男子生徒の目を一杯に引くほど。

さらに剣道部だけでなく一年生の中ではクラスという枠を越えたムードメーカー的存在なのだ。

「やうちゃんこそ、毎日欠かさず朝練してるんでしょ？ 私だって週三くらいしか参加しないのに」

「まあ、俺はな。それより椎名はこの前の中間テストの補習の勉強は終わったのか？」

「もちろん終わってないよ」

マンゴーのように巨大な胸を張り、「えつへん」と自慢げに威張る。

当然颯太は「威張るな」と手首のスナップを利かせたツッコミを入れる。

「つたくしょうがないな。今回もそりだと思つてノート作つておいたぞ」

そう言つて椎名に手渡した高校生が一般に使うノートの表紙に『バカのための補習ノート』とネームペンで記載されていた。

「ひ、ひどいよ～～バカじやないってば、ただ勉強してないだけで……」

手渡されたノートで埃を払つような軽い力で颯太の頭を連打しながら椎名は泣き叫んだ。

「それをバカだつて言つてるのがわかんないのか？ これに懲りたらもう少し真面目に勉強しろよ」

「だ、だつて～～」

がっくりと首を落としてうなだれる。

「文句があるならノート没収だぞ」

いつの間にか椎名の手元に握られていたはずのノートは部活で豆だらけの颯太の手に戻つていた。

「は、はあ～～ん、か、返してよ～～」

取り返そつと必死に跳躍するも背丈が颯太より五センチも短い椎名には高々と伸ばされた手元にそれには届かず、間抜けなウサギのジャンプを繰り返す。

「次のテストは全教科最高記録更新できると約束するなら返してやる」

「え、そんなの無理だよ。私のお頭が空なの知つててそういうイジワル言うの？」

涙で潤う瞳を晴天に輝く太平洋の水面のように煌かせ、上目遣いで颯太の顔を覗き込む。

その表情はふさふさな毛玉のようなチワワよりも愛らしく、プロボクサーのフックが鳩尾に入つたくらい強烈だった。

「その顔は俺には効かない。そういう顔はおまえにより寄つてくる男子生徒にでもやつてやれ。たぶん十人に一人くらいは心臓麻痺を起こすぞ」

「わ……私はそつちやんしか

トーンが急に落ちていくその先の言葉は颯太の耳には届かず、椎名は口元をすぼめてその自慢の太陽の笑顔が消えてしまった表情を伏せてしまつ。

「なんか言つたか？」

「……」

「ノート返すからさ元気だせよ」

「やだ」

と言いつつ眼前に差し出されたノートをカルタ取りのよつに素早くひつたくり、今度は奪われないようにカバンのファスナーの奥に収めた。

「補習の勉強手伝つてやるからさ」

「やだ」

頬を風船のように膨らませ、首を「ふん」と横に振る。

心なしか椎名のアスファルトを蹴る音のリズムが早くなつていぐのを颯太は感じていた。

歩く速度を高めてどうとか椎名の隣に居座りながら機嫌を直そつと頭からひねり出した条件を提示する。

「じゃあ、今度買い物に付き合つてやるよ。椎名の好きなだけ俺を連れまわしてもいいからさ」

もうすぐランニングからダッシュのスピードに切り替わるうとしていたすぐ直後の事だった。

突然動いていた足を止め、沈黙すること数秒間。

「ほんと?」

アスファルトに向けられた表情の読めない顔、トーンの低い声でそう尋ねた。

「ああ、ほんとだつて」

「一緒に補習の勉強手伝ってくれるの?」

「もううるさい

「今度の日曜日は、田舎へ帰る?」

「おひ、ひおひおひん」

そしてさうして沈黙の間が数秒、

「じゃあ、約束だよ」

天使の笑顔が再び光臨する。

「えへへ」

颯太もよつやく肩の力を抜き安堵するが、ふと自分が了解してしまつたことに違和感を覚えた。

(ドードー)

鼻歌を語りながらスキップを踏む椎名の嬉しそうな表情を眺めてい

る

とそんなモヤモヤする違和感も煙草の煙のよつに消えてしまった。

「もううるさい、約束だからね」

振り向かずまで海のよつな青空を背景に颯太に言つた。

「わかつてゐる。俺が約束破つたことあるか？」

「ない。そうちやんが裏切らない人だつてことは幼稚園のころからわかつてゐるよ」

椎名は颯太と幼稚園以来の幼馴染で、それは小学校、中学校、そして現在の高校生にまで持ち越されているほど深い関係である。

颯太の女子が苦手になり始めたのは中学生の頃、それ以前の女友達は椎名だけだつたのが現在に至つては言つまでもない。

「俺も椎名が底抜け、じゃなくて底なしのバカだつてことはわかつてゐる」

恥ずかしくて「笑顔が一番似合つてゐる」だなんて言えるはずもなく、ごまかしにいつも颯太はそう言つてしまつたのだつた。

「ふふ、そうだね」

それでも純粋な微笑みを浮かべて、再び鼻歌を奏で始める椎名。

足取り軽いステップでアスファルトを打つ音が加わる。

早朝の薄ら寒い気温を暖めてくれるような気持ちを感じながら颯太は寝癖のついた髪をつまみ、履き始めてから一年以上経つのにも関わらず未だ履きなれない革靴で地を踏みしめていった。

第一話・出会い 一部（後書き）

書けば書くほどぐたぐたな文章になつていいく気がします。承知のうえで次回もご覧下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3652f/>

グッバイトリガー

2011年1月9日01時46分発行